

た。マラリアの高熱と悪寒で苦勞しましたが（私も罹病）、丈夫な者が使役に出されました。仕事は荷物の荷揚げ、兵舎の建築、掃除などでありましたが、「なるべく地下足袋を履くな」と注意がありました。なぜかという、豪州兵は戦闘中、地下足袋を履いた日本兵に夜襲されたためだということでした。そのため軍靴を履かされたのでした。豪州兵は余り悪くなかったのですが、戦争中、日本軍にやられた下士官、兵に報復された者もあつたのです。

ラバウルは大基地であり、砲弾や糧秣・被服なども蓄積されていたようです。戦争後は食糧の支給を受け、米や乾パン（日本軍の物か）も食べられるようになりましたが、栄養失調や病気で三分の一は死んだといえます。（内村氏に罹病の証明書を見せられた）

帰国のための出帆は、昭和二十一年五月三日（日本の輸送船）にて出帆、名古屋港に上陸して、復員をしたのは五月十四日でした。

帰ってからは実家で農業をやっていましたが、復員後、マラリアは一、二回出たがその後は出ず、入院も

しませんでした。

## ソロモン群島転戦

### 本隊玉砕墓島

### ブーゲンビルの二年間

島根県 松本良造

大正十一年七月一日、現住所の出雲市今市町で出生。家業は農業、父は健在、母は義母、姉妹という家の長男でした。昭和十七年七月の徴兵検査でした。

（持参された「徴兵検査通書」には：

「右徴兵検査執行ニ付左記日時徴兵署ニ出頭シ本書ヲ以テ徴兵署ニ届出ツヘシ

出頭日時 昭和十七年七月三十一日午前七時

徴兵署出雲市今市国民学校北校舎

昭和十七年七月一日 市長 岡田秀勝」

裏面には

「受検ニ関スル心得（片仮名フリ）」

検査の結果は、第一乙種で現役、小児の時に体が弱かったし体重が足らぬので甲種ではなかった。私はそのころ、大阪の汽車製造の会社に十五年勤めていた。会社は名前のとおり内外の客車、貨車などの製造をしていた。

私は兵科は歩兵かと思っていたが「主計兵を命ず」とあったので、そのとき始めて海軍と分かった。大阪堺の下宿先に、自宅から入営通知が送られたので昭和十七年十二月に退職した。本来なら退職しなくてもよいのだが、私も農家の長男で、軍隊から帰っても堺で会社勤めはできぬと思ったからである。

昭和十八年一月十日、大竹海兵団入団、初めから科が分かれ、主計科では三個分隊、内徴兵一個分隊、現役一個分隊、召集補充一個分隊で、海兵団全体で約一万人もいた。

一個分隊は十五、十六班で私は十二班。海軍の分隊は陸軍の中隊、分隊長は大尉、分隊長は兵曹長か上等兵曹二人ぐらい。他は班長で、上等・一・二等兵曹である。

兵舎は各分隊で、陸軍の兵舎と一緒、寝るのはハンモック。ここでは一般兵科も習うが、主計は食料のことが多かった。主計は衣・糧・経と分かれる。經理は給料・人事・文書をやる。經理は經理学校出身者が多く、たまには兵科から入った人もいた。主計科からは航空科へのみ代わられるが、他兵科へは代われぬのとことであつた。

私の教育・勤務は一般兵科と炊事のことが多かった。栄養・カロリーなどの計算であるから今の栄養士の仕事である。米・肉・魚・野菜などバランスをとって毎日の献立を決める。海軍は合理的で栄養も良く、陸軍とは内容も作り方も大分違っていた。終戦後、ソロモンで豪州軍から給与を受けたが、陸軍はよく使いこなせぬので、海軍に習いに来たこともあった。

私になぜ主計科かと思つたが、入団前事務員をやつていたので、体が弱いと思われたのかもしれない。主計の仕事は一般的には炊事だった。衣料その他は海軍の經理学校出がやる。兵隊は上になれなかつたが、後には上げられるようになった。經理というが前身は魚屋

や菓子屋、料理屋出が多かった。

経理や看護兵は裏方で数は少なかつた。初年兵のときは射撃、銃剣術、手旗信号、演習(陸戦隊としての)

を訓練した。基礎教育は三カ月半、そのうちにカリキュラムにより教育される。一、二とやらされるが陸軍の編上靴と違い海軍は短靴なので踵が減り、取り替えてもらうのだが、これは民間の靴屋がする。

給料は帰るまで受け取ったことがないので、給料を使ったこともない。海兵団退団の前に本人の希望を聞かれたが、兵科と異なり範囲が広い。戦艦とか航空母艦とか航空隊希望が多かつた。私を教育してくれた下士官は「お前は体が弱いから、大きい艦に行くと相当しごかれるから、駆逐艦に乗れ」と言われた。小さい艦は体がきつく、仕事自体はえらくても、精神的ないじめがないからだという。大きい軍艦の方は次の新兵が入るまでしごかれる。

そこで、新しい一等駆逐艦「陽炎」が竣工するので、それに乗りたくて希望した。しかし乗る前に沈没して、ついに乗ることができず、結果的には一カ月休めたこ

とになる。四月十五日大竹海兵団退団、同日呉海兵団仮入隊。

昭和十八年五月、軍艦(糧食艦)「間宮」に便乗し、他の兵科の者たちとトラック島へ送られた。ところが艦がなく、各島の電波探知器建設路作りに従事し約一カ月いた。ダイナマイトで岩(珊瑚礁など)を爆破したり草刈りなどしたが、我々は仮入隊の身であるから全兵科の者が参加した。

乗組予定の駆逐艦「陽炎」がソロモンで沈められたので、乗る艦がなくなつたので「ラバウルへ行け」と命ぜられた。「陽炎」要員の四、五十人は呉の第六特別陸戦隊に編入となる。本隊はラバウルにいるので、船がなく一カ月滞留、私は Deng 熱で倒れていて七月終わりにトラック島を出た。

七月下旬、ソロモン群島ブーゲンビル島のブインへ一昼夜かかり(駆逐艦で)進出、ブインに約一週間。八月上旬に鯉漁船に五十人ぐらい便乗、主計は私一人だった。漁船は速力が遅いし、昼は敵機に発見されぬよう島陰に木の枝などで偽装し隠れていたので約十日

ぐらいかかり、ニュージョージア諸島ムンダに進出した。

ニュージョージアには陸海軍が沢山いたが連合軍来襲というのでコロンバンガラ島へ撤退し約一カ月ぐらいいいた。丸い島だった。山奥へ入った。天幕も家もなく、檳榔樹を切って小屋を作った。高床式にし、床は寝るだけ、私は炊事係、他の兵隊は退避のみ。一斗桶でくんだ海水から塩を採り、補給された梅干を備蓄していた。しかし、海水を運ぶのには苦勞した。山の中では道がない。そこを二人で桶を担いで登っていく。着いたときには二分の一ぐらいになってしまう。これが我々の仕事で、何人も担ぐのである。

火を燃やすのだが、煙を上げると爆撃されるので夜やる。しかし、私は下の兵隊なので何人兵隊がいたか分からない。特に「陽炎」乗組要員の編入者だから知らぬ人ばかり、幸いにそのときは爆撃はあまりひどくなく犠牲者は余りなかった。

続いてチョイセル島まで約十日間、大発へ夜中に乗り、夜明けまでに着く。途中魚雷艇や軍艦でやられる

ので大発が沈められ、その数が少なくなった。敵は我々の撤退を妨害する。我軍の駆逐艦はこれを防ぐ、両軍の艦砲が花火のようだった。敵のは曳光弾が多かった。日米の砲撃が分かった。我々大発は両軍の砲火の中をくぐり抜けて進んでチョイセルに着いた。

チョイセル島から十日間で同島を縦断しブーゲンビルのブインに着いた。撤退のとき、陸軍は陸戦に馴れているから各班ぐらいい、その間距離をおいて歩くが、海軍は訓練されていないので長蛇の列で、途中ストップしてしまうので苦勞が多かった。

ブインに着いて、十月から十一月ころ、呉第六特別陸戦隊本隊は、アドミラルの警備隊になった。そのとき、ラバウルへ出る時が遅れたので、私たちは本隊から残された。呉第六特別陸戦隊、バラレイ島の一部は敵機を七、八十機撃墜したという戦果を挙げたが、本隊は玉砕してしまったため終戦まで追及できなかった。私たちが主計兵だけ十人が、ブインに残された。

米軍は比島を攻める途中で、アドミラル諸島を玉砕させている。そのために、我々ブイン基地が助かった。

ここには海軍の第一根拠地隊司令部があり、そこへ正式転属（私の本隊は無くなったので）となって、昭和十八年十月から終戦までいたことになる。

戦闘や航海とは別にして、一番苦しかったのは十九年五、六月ころから、食料事情が悪くなり、多くの人々が栄養失調で死んで、一時は亡骸を埋めに行く人もいなくなった。担架に載せてトラックで運ぶが、頭と足があつて体は骸骨に皮が付いているようなもの、それが十九年後半まで続いた。

その後は現地調達するようになった。陸軍の部隊も相当あつたが、畑を作り芋を耕作していた。陸軍は補給が無いので常に現地自活をしなければならなかつた。しかし、海軍は補給を受けるのが従来のやり方だったので、潜水艦でドラム缶に米と蠶節を詰めて、甲板に積んで夜間、港に入って海へ投げ込み、それを取りに行つて、それを食料としていた。

海軍も陸軍にならつて現地調達と自活をしなければ生きていけなくなつた。岸壁に積んであつたセメントで、下積みの中のまだ使えるのがあつた。それを

使つて炊事場を地下に作つた。横穴式煙道も作り四、五十メートルほど先から煙を出したが、上に木などをかぶせてあるので、煙も薄く霧のようになり、敵の飛行機から発見されぬようにした。この付近には山本元帥の墓も作られてあつたが、兵の名は付いていたが元帥の名を付けてない土饅頭の墓だつた。

海軍もようやく食料確保をはかるようになったが、その手始めとして配下各隊の食料の在庫調査を司令部の命令でやつた。各隊の在庫数はバラバラで、多い隊、少ない隊があつたので、その報告書にもとづき人数割にし、平均をとつて再配分をすることとした。正直に書いたので在庫食料を取られ他へ配分させられた部隊から、戦後収容所で我々主計は文句を言われた。

平均化し、食料が乏しくなつてから自活を始めたので大変だつた。人数が多く収穫が間に合わなかつた。

陸稲や玉蜀黍は固くて食べられぬので食料とはならなかつたし、量も少ない。したがつて、食料は甘藷が主体で他はタピオカ、バナナだつた。椰子は原住民の部落にはあつたが、それを採るようなことは禁止してい

た。潜水艦で運ばれた米を貯蔵していたが虫が付いていて、洗うと粉になってしまうので、なるべく洗わぬようにしたが、全体の食料からすればわずかな量にすぎなかった。

野草も食べられるものと食べられぬものがあり、鼠、とかげ、蛙、蛇も大した量ではなかった。海で鮫や海亀や、川で鰐を獲ったりしたが、余り手に入らぬので一般の人の口に入る量はわずかなものであった。

栄養失調、飢餓の他にマラリヤ、 Dengue 熱など南方の熱病も多くなり、体の抵抗力も衰えたので、脚気を併発し歩行困難な者も多くなった。特に赤痢など罹病すると下痢が止まらなくなり、薬も無いので死亡する者も多くなった。

住居は司令部の屋根はトタンだった。原住民の教会などの屋根も厚い鉄板を使っていたが、普通の家は椰子の葉を葺いて屋根としていた。当然我々の兵舎も同様なものであった。空腹に悩まされ、病気が多く、連合軍の空襲も十八年から十九年初めまでは、午前と午後と定期便のごとく、グラマンや双胴のロッキード P

38 が毎日飛んで来る。自分の頭の上で爆弾を落とされる  
と弾は分からねぬが、脇で見ると爆弾の投下がよく見え  
た。

ボーイング B 17 や、コンソリテッド B 24 などの爆撃  
機は水平爆撃だが、直撃は比較的少なかったが破片で  
やられた人もいた。そのうちに段々と横着になり、無  
神経になって退避しなくなったため、爆風や、破片で  
の負傷者も少なくなかった。しかし、爆撃より栄養失  
調から病死する者がほとんどだった。

終戦は、八月十五日ブインで分かった。無線がある  
し、新聞もあった。玉音放送は聴いたが内容は余り分  
からなかったが敗戦であることは判断がついた。山の  
中に第八艦隊（軍艦はないが）の司令部があり、終戦  
状況は分かったと思うし、動揺は少なかったと記憶し  
ている。

収容所へ収容されるまで兵器の処理や、日本軍の恥  
だからと手入れをした。また、現地人は蛮刀ぐらいし  
か持たぬので、兵器が渡ると大変と管理も厳重にして  
いた。内南洋、ニューギニヤなどは豪州軍の管轄も決

められていたが、兵隊の素質は余り良くなかった。せっかく手入れをし磨いた兵器は皆海へ捨てられたようだ。

収容所へ船で連れて行かれるが帰ってきた者は一人もないので、殺されたのではと不安であったが、いよいよ出発となって、我々炊事係には鍋、包丁などの携行が許され収容所の島へ行った。しかし、統率者は一人くらいで、他の士官は別に集められ、住民らの面通しをされる。「この兵隊だ」と指を差されると、間違いであっても戦犯にさせられた。士官に比べ兵隊は余り厳しくなかったようだが、ときには戦犯と指定された者もいた。これも運というよりほかなかった。

検問に際しては、所持品の万年筆、時計などは豪州兵に取られてしまった。島の名前は不明だったが食料は豪州給与である。小麦粉、玄米、砂糖、バター、乾葡萄、乾燥あんず、人参、玉葱などで、蓋付きの亜鉛メッキドラム缶や段ボール箱に入れてある。

目方は英式のヤード、ポンド法の表示だから、これをグラムに換算する。我々炊事係は戦中の食料で苦労

しているから、配給された物を万が一の時のことを思つて予備として貯えていた。これを豪兵に見つかり配給停止をくらった辛い経験もあった。主食は小麦粉なので、パンを焼いたり、団子、饅頭などを作った。陸軍はバターを余り使わぬが、海軍はよく使った。調理の方法にも陸・海軍それぞれ特徴があった。飢餓と病気の戦いの連続であった我軍の中には、逆に食べ過ぎて体を悪くした者も多かった。

内地帰還については南方諸島は食料、病気などの関係もあつてか、比較的早期にという配慮があつたのか、収容所にいたのは昭和二十一年一月までであり、復員船は航空母艦「葛城」であつた。東部ニューギニアの復員者に空きがあつて、我々が幸運にも乗艦できたのである。「葛城」の甲板は砲などが取り除かれ平らになつていた。

乗組員は日本人だが顔の色が白赤いので、他の人種だと思つてほろどした。我々の顔は真っ黒だからである。途中油の補給で米基地に停泊し、後は一直線二月二十五、六日に浦賀へ着いた。浦賀出発は二月十日で故

郷の出雲市へは十二日であった。

思えば大竹海兵団入団以来滿三年余、南洋・ソロモン諸島を転戦すること二年数カ月。本隊は玉碎し、追及不能の我々は、幸いに玉碎を免れたが、空襲を除いては飢餓と疫病、熱病との戦いであった。

前述のごとく、死者は骸骨のごとく、これを埋葬する使役にもこと欠く苦しい日々でありました。しかし、我は生還し、今日、生あることを喜ぶとともに、亡き戦友の御冥福を祈ることを忘れてはいない。